

## ベトナム → フランス

- 1) 17世紀、大越国は黎朝の末期だった。黎朝を受け継ぐ北部の鄭氏と中部・南部の阮氏（広南阮氏）がベトナムを二分し、抗争していた。1771年に阮氏の圧政に苦しむ農民が西山の乱を起こした。これを機に北部の鄭氏が南下すると、これに帰順した西山党※1は南部を支配する阮氏を滅ぼし、次いで北部の鄭氏も滅ぼした。両氏はともに滅亡し、西山朝がベトナムを一時的に統一した。

※1 西山党とは、広南阮氏とは無関係の別の阮氏3兄弟とその部下たちのことである。西山は「せいざん」または「タイソン」と読む。阮は「げん」または「グエン」。

阮氏（広南阮氏）が滅びる時、王族の【1: 】※2が逃れ出た。彼はタイ・ラオスやフランス人宣教師ピニョーの支援を受けて戦い続け、1802年、西山朝をやぶって全ベトナムを統一。阮朝越南（ベトナム）※3を建国した。都はユエ。清朝に朝貢。清の制度を導入、儒教に基づく国家体制を整え、カンボジア、ラオスをめぐってチャクリ朝と争った。

※2 阮福映（げんふくえい 位1802-20）は阮福映でも可。阮福映はコーチシナで伝道中のフランス人宣教師ピニョー（1741-99）と知り合い、ルイ16世と仏越攻守同盟を締結したがフランス革命で援軍は来なかった。ピニョーは義勇兵を募って阮福映を助けたが阮朝成立前に死去した。阮朝越南の2代目以降の歴代国王はキリスト教を弾圧し、このことがフランスによる侵略の誘因となった。

※3 阮福映は1802年に阮朝の初代皇帝として即位。清朝に朝貢し、1804年越南国王に奉じられた。嘉隆帝と名乗るのは1806年以降。だから、越南（ベトナム、ヴェトナムとも表記）という国号は1802年以降である。それまでは11世紀以来、大越が国号。

## 2) 越南(ベトナム)の植民地化

既に1757年のブラッシーの戦いで、インドでイギリスに敗退したフランスは、19世紀中ごろ以降、ナポレオン3世治下で越南を植民地化の標的とし、カトリック教徒迫害を口実に軍事介入した。

- ア) 1858-62年 【2: 】…フランスは阮朝の宣教師殺害 ※4、カトリック教徒迫害を口実にスペインと共同出兵。サイゴンを占領（1859）。【3: 】を締結（1862）させた。フランスによるインドシナ植民地化の第一歩と言うべき重要な条約である。  
※4 殺害された宣教師というのは、もちろんピニョーではない。  
【3】の要点：①【4: 】の東部3省とサイゴンをフランスに割譲。サイゴンは「コーチシナ」に含まれない。西部3省は1867年武力占領

②ダナンなど3港の開港。 ③カトリック布教の自由を認める。

インドシナ出兵は全期間（1858-67）にわたってナポレオン3世 位1852-70の政策として遂行され、仏越戦争はその一部である。フランスは早速メコン川のデルタ地帯に米作プランテーションを開いた。

- イ) 2つの【5: 】でベトナムの保護国化は確定した。

ユエ（フランス語的な読み方）とフエは発音が違うだけで同一の都市。本書ではユエと表記。

1882年の仏人旅行者迫害を口実にフランス軍がトンキン（ベトナム北部）を占領する中で…

- ①1883年のユエ条約（第1次ユエ条約）…これは仏全権大使の名をとって【6: 】とも言う。これで北部と中部を支配下におき、基本的にベトナムはフランスの保護国にされた。フランス軍に抗し、北部に拠点をおく黒旗軍が参戦し、激しく抵抗を続けている時期に締結されたあくまで仮の条約である。  
②1884年のユエ条約（第2次ユエ条約）…パトノートル条約とも言う。①では不明確だった「保護」の内容を規定した別の条約で、外交権がないことも明記されている。「ベトナムの保護国化が確定した条約は何か」と問われたら、必ずこちらを答えよう。長くてもよければ、「1883年と84年のユエ条約によって」と書いてもよい。

- ウ) 1884-85年 【7: 】…ベトナムに対する宗主権を主張する清がフランスに宣戦布告。戦争になる。1885年、清は敗北し、【8: 】（清仏天津条約）で、フランスのベトナム支配を認めた。「天津条約」は全部で3つある。

劉永福（1837-1917 中国人、阮朝の軍人）は1867年頃トンキンで黒旗軍（中国人の軍隊）を組織、清仏戦争では清に協力、フランス軍と戦った。日清戦争では台湾防衛に派遣され下関条約締結後も1896年まで日本に抵抗した。09W

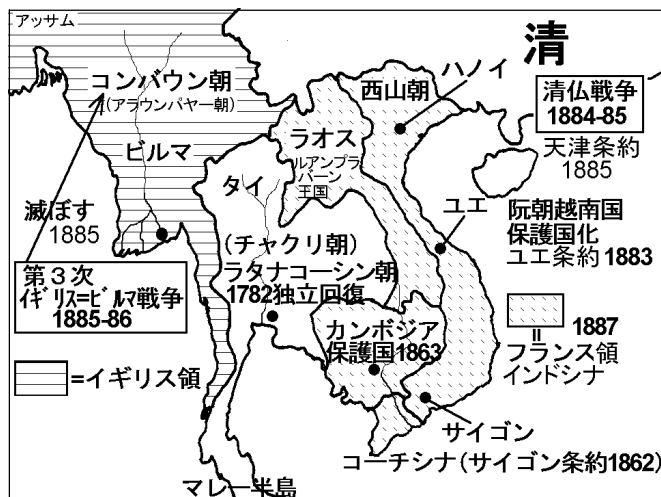
## 3) フランス領インドシナ連邦は成立時(1887)にはベトナムとカンボジアだけだった。

1863年 カンボジア王国を保護国とする。

1887年 フランスは、ベトナムとカンボジアをあわせて、【9: 】の成立を宣言した。主な構成地域はベトナム（①コーチシナ・②アンナン・③トンキン）とカンボジア。①②③はフランスなどが勝手につけた当時独特の呼称。①=ベトナム最南部、②=ベトナム中部（唐の安南都護府が語源）、③=ベトナム北部総督府はハノイに置かれた。

1893年 【10: 】を保護国にする（→1899年 ラオスをフランス領インドシナ連邦に編入） 09W  
ラオスのルアンブラバン王国（1707-1946）は保護国化以降も存続。都はルアンブラバン。

- 4) フランス領となったカンボジア・ラオスでは、ベトナム人の下級官吏がフランス統治の手足として雇用されていた。植民地化以前のベトナム王朝による圧迫や第二次世界大戦下のインドシナ共産党（1930年結成）におけるベトナム人の独占的指導も加えて、これらはカンボジア・ラオス国民の今日まで続く反ベトナム感情の源泉である。フランスに限らず、一般にヨーロッパ列強はインド人や中国人の商人を便利に使ったばかりでなく、特定の民族や宗教の信者を意図的に官吏・軍人に採用して支配の手足として使い、地元の人々を分断することをしばしば行なった。そのために残された反感は、独立後も



「植民地協力者問題」などという形で大きな課題となっている。

**タイ** 東南アジアで唯一独立を維持した。 アユタヤ朝は1767年、ビルマのコンバウン朝に滅ぼされた。

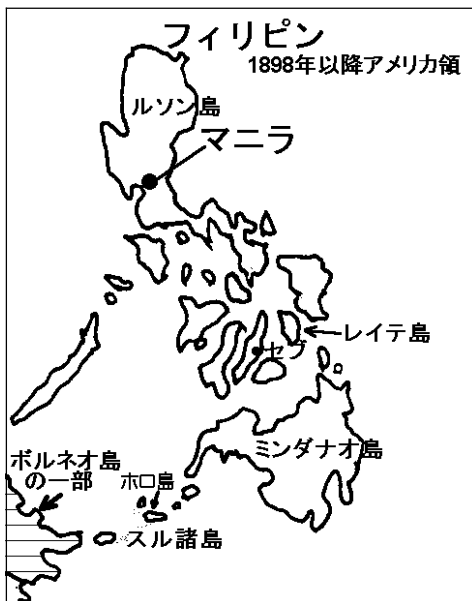
- 1) 1782年 タイでは【11: 】(=チャクリ朝、バンコク朝とも呼び、現在の王統である)が成立、独立を回復。ビルマ(コンバウン朝)の侵入を撃退。ほぼ、現在のタイ全域に相当する地域に中央集権の統治を行った。首都はバンコク。
- 2) 19世紀前半までは閉鎖的な政策がとられてきたが、19世紀後半、ラーマ4世 位1851-68の時代に政策転換を行い、王室による貿易独占を解除した。華僑を活用して中国との貿易を発展させ、米の商品化が進み、**チャオプラヤ川デルタの水田開発**が行われた。**ラオスをも実質的に支配**していた(1893年まで)。列強の進出で、1855年のイギリス=タイ友好通商条約(ボウリング条約、治外法権と低関税)、1865年のフランスとの修好通商航海条約など不平等条約の締結を強いられたが、**東南アジアで唯一独立を維持した**。イギリス、フランスの緩衝地帯に位置し両国が侵略をためらったことも幸いした。タイ侵攻を企てた国はイギリス、フランス以外では20世紀に入ってからのものである。
- 3) 1880年代、ラーマ4世の後継者、【12: 】(=チュラロンコン) 位1868-1910のもとで、外国への留学の推進、外国人専門家を招いて行政・司法組織を改革するなど近代化政策が遂行された。これを【13: 】と言う。立憲体制の成立には至らなかったが、イギリス・フランスとの勢力均衡策をとり、植民地化を回避した。ラーマ4世、ラーマ5世父子は、今でも尊敬されている。

ラーマ4世(「シャム王」と表現)が、息子(後のラーマ5世)のためにイギリス人女性の家庭教師アンナを迎えたために、宮廷でおきる文化摩擦をユーモラスに描いたミュージカル映画が『王様と私』である。1956年制作。主演はユル=プリンナー(シャム王)、ガートルード=ローレンス(アンナ)。この女性は実在し、英語の家庭教師として王宮で教えたことも史実であるが、それ以外はシャム王とアンナが恋に落ちるところなど、ほぼ全部がフィクションである。アジア人蔑視と受け止められる表現も含む。ラーマ5世が奴隷制廃止宣言をしたのは、彼女から『アンクル・トムの小屋』を読み聞かされたからだという説もあるが、単に時流に合わせて適切な判断をしただけだという意見も強い。この映画のテーマ曲は有名な『Shall we dance?』で、これを映画の題と曲に頂いた日本映画(『Shall we ダンス?』)も存在する。なお、現在もタイは王室の権威を重んじる国で、『王様と私』を上映すると不敬罪になるから注意しよう。タイでは不敬罪は外国人にも適用される。

タイは1932年以降は立憲君主制に移行、国王は象徴的存在だが、ラーマ9世 位1946-2016は政治的危機にあつては果敢に国政に介入することもあり、地方視察も精力的に行い、泥濘や雨天の中でも人々の輪の中に入っていくなどの行動で、国民の敬愛を集めた。日本ではプミポン国王として知られているが2016年に亡くなり(在位70年)、現国王はラーマ10世。

## フィリピン → スペイン

16世紀以降スペインが支配。



- 1) 1521年マゼラン艦隊が到達(マゼラン自身は同年マクタン島で戦死)。フィリピンのコンキスタドールと言えばレガスピ。彼の軍隊は1571年にはマニラ市を含む諸島の大部分を征服し、フィリピンはスペインの領土となり、カトリックが強制された。南部のホロ島やミンダナオ島のムスリムはスペイン人に対して頑強に抵抗し、300年以上に渡って**モロ戦争**と呼ばれるスペインとイスラーム勢力との間の抗争が続けられた。スペイン支配地域でもカトリック化した先住民の反乱が相次いだ。従って南部への侵攻は18世紀と遅く西南ミンダナオ島、スル諸島、南パラワン島では、スル王国をはじめとするイスラーム勢力の抵抗に遭い、最後まで征服できなかった。
- 2) スペイン領ルソン島のマニラは16世紀以降、【14: 】の中継地であった。ラテンアメリカ産の銀貨(メキシコ銀)と中国産の絹織物や陶磁器とを交換した。メキシコの独立(1821)以降は衰退。
- 3) 1830年 マニラ開港。 1834年 マニラ、自由港となる。ルソン島では、スペインの統治下、上記2)の中南米・中国間の中継貿易に加えて、新たにヨーロッパ向けのマニラ麻、サトウキビ、タバコなどのプランテーションが経営された。これらを販売したのは、王立フィリピン会社である。カトリック修道会を中心に大土地所有が広がり、先住民を苦しめた。住民の大半は強制的にカトリック化された。
- 4) 1898年 【15: 】の結果、アメリカ領となる。

## 2012明治(抜粋)

正解 問1 B 問2 E

問1 西欧列強の東南アジアに対する植民地政策に関する以下の説明のうち、適切でないものを一つ選びなさい。

- A. ボーリング条約により、タイはイギリスに治外法権と低関税を認めた。
- B. フランスはユエ条約により、ラオスを保護国化した。
- C. ナポレオン3世はスペインと共同出兵してサイゴンを占領した。
- D. オランダはジャバ島で強制栽培制度を実施し、莫大な富を得た。
- E. スペイン支配のもとで、マニラが正式に自由港となった。

問2 西欧列強の植民地政策に対する抵抗闘争に関する以下の説明のうち、適切でないものを一つ選びなさい。

- A. コンバウン朝は3回にわたってイギリスと戦争した後、滅亡した。
- B. ジャワの王族ディボネゴロは、オランダに対して大規模な反乱を起こした。
- C. アチェ王国はオランダの侵略に対して、アチェ戦争を起こして抵抗した。
- D. 劉永福は阮朝に仕えて黒旗軍を編成した。
- E. マレー半島におけるイギリスの植民地支配に対して、シパーヒーの叛乱が起こった。